

チベット密教の一断面

——ツォンカパ造『真言道次第論』を中心に——

ロルフ・ギーブル

一

周知の通り、チベット仏教において密教が占める比重は中国仏教あるいは日本仏教におけるそれよりも数段と高い。にもかかわらず、その性格の特殊性も手伝って、チベット密教に関する研究はチベット仏教の他の側面に関する研究に比べて、やや遅れている感を免れない。ようやく最近になって、インド仏教を説明するための一手段としてではなくて、その内在的な価値のためにチベット仏教を研究するという認識が定着するに連れて、チベット密教に関するすぐれた研究成果がいくつか発表され

るようになった。しかしチベット密教全体に徴してみると、それはまだ微々たるもので、チベット密教は現在なお仏教学全体における大きな未知数の一つであるといつてよい。

このような現状を打開するために先ず要求されるのはいうまでもなく、チベット人自身の手による密教の綱要書を初めとして、彼らが数世紀にわたって密教について残してきた多数の文献を検討して研究することである。

ところが膨大な量にのぼるこの文献群を読破し、その多様な内容を総合的に把握するということは容易ではない。ましてや筆者の力量をはるかに越えていることはい

うまでもない。そこで与えられた任務を果たすために、

本稿ではチベット仏教の代表的な学僧ツォンカパに焦点を絞り、特に彼の二大著作の一つである『真言道次第論』を取り挙げて、その内容を紹介しつつ、チベット密教の一斑を明らかにしてみたい。

二

チベット密教の一断面

チベット仏教ゲルク派 dGe lugs pa の始祖ツォンカパ Tsong kha pa (宗喀巴、一三五七—一四一九)の伝記については既に内外の学者の研究があり、その大要が長尾雅人博士の『西藏仏教研究』⁽¹⁾の中に詳しく紹介されているので、ここでは触れない。ただ、『真言道次第論』についていえば、同書はその奥書きによると、ラサの東南ヤルン地方のオデグンギェル 'O de gung rgyal に付属する弥勒院(別名、秘密真言堂)で著述されたという(Wa, 210a⁹)。これはもう一つの大著『菩提道次第論』⁽²⁾が著された、ツォンカパ四十六歳の時より約二年後のことで、ツォンカパは四十七歳の頃からこの地に二年間滞在して頭密に関する多くの著作を物したのである。⁽³⁾

ツォンカパを鼻祖とするゲルク派の別名、新カダム派 bKa' gdams gsar ma から推察されるように、ツォンカパの密教観の中核をなすのがカダム派 bKa' gdams pa の開祖ドムトン 'Brom ston rgyal ba'i 'byung gnas (一〇〇四—一〇六四)の師匠アティーシャ Atiśa (九八二—一〇五四)の頭密兼修の原則である。すなわち発菩提心、六波羅蜜および止観からなる頭密共通の次第に従って頭密を学んだ後、初めて密教の修学へ進み、頭密の学習を完了させるとする。頭密共通の次第を説く『菩提道次第論』の末尾に金剛乘(密教)への趣入を勧める一段が付け加えられたのもこの趣旨によると思われる。⁽⁴⁾『菩提道次第論』に見られる密教への論及はごく簡単な概略だけであるが、それを敷衍してインド密教初頭以来の諸説を批判しつつ、密教の修道を詳細かつ体系的にまとめたのがここで取り挙げる『真言道次第論』なのである。

通称『大』真言道次第論 s'Ngags rin [chen po] の具名は『一切の秘密の要点の開頭』と名付ける勝者・遍主・大持金剛の道の次第 rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rin pa gsang ba kun gyi

gnad nam par phyed ba shes bya ba (東北No. 5281、北京版 No. 6210) といひ、二十四函からなるツォンカパ全集の最後の二函を占める大作である。ツォンカパ全集にはいくつかの版が現存するが、最も参照しやすい『影印北京版西蔵大蔵經』所収の「宗喀巴全書」(第一五二、六一卷)に収録されている『真言道次第論』は合計四二四枚、十四章からなる。紙幅の都合でこの大分な著作全篇にわたって述べることはできないので、先ずその梗概を知るために科文の抜萃を掲げておいたので、参照されたい。⁽⁵⁾これは、ツォンカパが自ら文章の間に挿入した科文の中から要点を抜き出して本書のあらましが一目でわかるようにまとめたものであるが、この粗筋だけでもその組織整然たること、また規模該博なる点がよくわかる。本稿ではその全文にわたって論究することは不可能なので、その内容に沿って特定な問題を拾いながら、ツォンカパの密教観の要点を概観することにした。

三

先ず、ツォンカパの密教観を考える上で基本的な問題

の一つは、ツォンカパが顯教と密教との関係をどのように考えていたか、という点である。前述のように、ツォンカパはアティ・シヤの顯密兼修の思想を承け継ぎ、また『菩提道次第論』の末尾に經(顯教)から真言(密教)へ進む必要性を説いているが、『真言道次第論』の中で両者の関係はどのように扱われているのであろうか。先ずこの点を検討してみることしよう。

この問題は主として本書の第一章、特に「大乘を二つに区分する」という項目(Dsa, 10b⁵ff.)の中で詳しく論じられているが、それに先立ってツォンカパは先ず仏教を小乗と大乘に大別し、それぞれの特徴を略述する。声聞乗と緣覺乗に分けられる小乗には從來、人無我への了解はあるが、法無我への了解はない、と伝統的に解釈されていたが、月称 Candrakirti の立場に依拠するツォンカパによると、法無我への理解なくして人無我の正しい理解があり得ないので、小乗にも人法二無我への了解があるという。⁽⁷⁾この点においては小乗と大乘に差はなく、小乗の特徴はむしろ「他人の利益を担うことに背を向けるので、自らの解脱だけのために進む」(Dsa, 5b⁹)

『真言道次第論』科文要略

北京版藏教
Dsa
1 b¹

序	目
第一章	教説に入る種々の次第の門を總括的に説示する
1	勝者の教説のみが解脫を求める者に入るべきところであることを説示する
2	それに入る種々の次第の門を説示する
3	乗一彼の区分
4	大乘の区分
5	大乘を二つに区分する
6	金剛乘に入る區別を別して説示する
7	眞言(乘)に入る種々の門がいくつあるか
8	入るところの門を異ならしめる特徴を説識する
9	それらの特徴を有する人々にとつての道を進む理趣を説示する
10	二つの大乘の道の共通な次第
11	所作行タントラの道を進む次第
12	共通でない金剛乘の道次第
13	所作行タントラの道次第
14	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
15	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
16	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
17	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
18	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
19	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
20	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
21	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
22	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
23	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
24	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
25	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
26	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
27	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
28	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
29	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
30	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
31	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
32	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
33	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
34	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
35	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
36	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
37	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
38	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
39	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
40	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
41	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
42	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
43	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
44	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
45	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
46	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
47	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
48	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
49	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
50	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
51	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
52	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
53	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
54	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
55	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
56	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
57	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
58	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
59	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
60	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
61	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
62	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
63	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
64	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
65	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
66	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
67	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
68	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
69	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
70	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
71	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
72	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
73	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
74	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
75	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
76	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
77	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
78	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
79	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
80	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
81	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
82	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
83	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
84	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
85	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
86	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
87	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
88	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
89	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
90	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
91	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
92	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
93	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
94	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
95	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
96	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
97	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
98	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
99	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する
100	所作行タントラ(「の道次第」をそれぞれ解説する

頁	章	節	内容
20	第九	瓶の灌頂の儀軌を説示する	
20	第十	瓶の灌頂	
38	前二	及び最後の灌頂を授けて未尾の儀軌を説示する	
40	秘密の灌頂		
47	般若・智慧の灌頂		
48	第四灌頂		
62	第十一章	兩次第の續合により菩提を成就すべきことを説示する	
66	器となつてから三昧耶と律儀を淨める		
85	三昧耶に仕してから先ず親近をいかになすべきか		
85	明恵によつて道を知るべし		
86	知つた義を修によつて實踐する		
86	兩次第の片方を實踐することによつて成仏せんと望む人を阻止する		
99	兩次第を含み離さず實踐する仕方		
99	兩次第の階義		
102	兩次第の数を確認する		
102	兩次第の順序を確認する		
104	兩次第それぞれ修學の仕方		
104	生起次第を修學する仕方		
157	密決次第を修學する仕方		
157	密決次第の一般的な結構を説示する		
163	密決次第の一般的な結構		
163	最初に修習する密決次第とその行および道の果を説示する		
163	最初に修習する密決次第を認識する		
163	その画(次第)に利益をもたらす方便を行う		
163	それらを三種の道において行する		
163	實踐の果を現證する仕方		

点にあるとみなされる。

続いて大乘も波羅蜜乘（顕教）と真言乘（密教）に二分される。波羅蜜乘の場合、「一般の道の体はただそれ〔六波羅蜜〕だけに尽き、それをまた見解によって分けるなら、中観と唯識の二つになる」（Dsa, 8b⁷）。但しこのうち、中観が唯識より優位とされることはいうまでもない。「一切衆生のために無上菩提を得ようと欲して、行いを六波羅蜜において学ぶこと」（Dsa, 8a⁷）は真言乗を含めた大乘共通の立場であるが、真言乗には更に波羅蜜乘にみられない大きな特徴が存するというのである。

真言乗 *sngags kyi theg pa* は「果乗」*bras bu'i theg pa* 「金剛乗」*rdo rje theg pa* 「方便乗」*thabs kyi theg pa* 等の異名がある（Dsa, 10b^{5ff}）が、「二つの道（波羅蜜乘と真言乗）の所得は、全ての過失が滅尽し、全ての功德が円満した仏であるということ」におけるは等しい」（Dsa, 14a⁷）ので、果については波羅蜜乗と変わりはない。また共通な見解と発心と六波羅蜜についても両者の間に区別はない（Dsa, 14a⁷）。それで

は両者の差はどこにあるのであろうか。やや長文になるが、次の一節の中でその答えが明示されている。

諸の波羅蜜〔乗〕の者には、諸法の真実たる無戲論を修習することによって法身と行相が随順する道を修習することはあっても、「三十二」相・「八十種」好によって莊嚴された色身と行相が等しいように修習することはないが、真言〔乗〕にはあるのである。それ故に、利他の色身を成就する方便について道の体が異なり大きな差別があるので、乗を二つになしたもうたのである。一般に大小乗は空性の般若によって区分せず、方便によって区分しなければならぬ。特に、大乘において二つに区分される場合も、甚深を了解する般若によって区分せず、方便によって区分しなければならぬのであり、方便の主要なるものも色身を成就するところにある。「何となれば」色身を成就させる方便、「すなわち」それ（色身）と行相が等しいように修習する本尊の瑜伽こそが他の乗の方便より勝れたものであるからである。（Dsa, 14b⁷—15a）

ここで顕密教判におけるツォンカバの基本的な立場が

端的に現われているが、その意味するところを少し吟味してみよう。ツォンカバは先に「全て〔の乗〕はいずれも最終的に成仏の支分であることを説示する」一項目を立て（Dsa, 8b^{5ff}）、また第一章の終りに「道には差別があるけれども、果には勝劣がないことを説示する」一段を設け（Dsa, 24b^{5ff}）、小乗も大乘も最終的には同じ「仏地に導く方便である」（Dsa, 10b⁵）と強調する。換言すれば、右の引用にも言及される「甚深を了解する般若」に関しては小乗も大乘も、また顕教も密教も全く同等で、優劣の差は認められない⁽⁸⁾。そして般若は法身に対応し、空性の修習によって得られるとする。

これに対して密教独自の最大の特徴は「利他の色身を成就する方便」、すなわち「本尊瑜伽」*lhai mal 'byor* の存在である。その内容は色身の三十二相・八十種好と一致した行相、また細分すれば仏の住処、身、受用および事業という四つの果と一致した行相の修習とされ、『真言道次第論』の中心課題はその修習の仕方を解説する点にあるといつてよい。その詳細に立ち入る余裕はないが、その根底にある「本尊瑜伽」という重要な概念に

ついては後に再び触れることにして、ここではツォンカバが密教全般について強調する二、三の他の点に注意しておきたい。

一つは智慧と法身と方便と色身の不可分の関係である。これはよくいわれることであるが、ツォンカバはこの点を取り挙げて、経論からの引用に基いて詳しく論じている。その論旨を要約すれば、果位の仏身において三十二相・八十種好に莊嚴された身とそれに依止する無所縁の心が一体不可分の状態にあるので、それを目指す因位においても果位と一致して色身を成就する方便と、法の真如性を縁する智慧を合わせて修習しなければならぬ、ということになる。そしてシャーンティパー *Śāntipa* からの引用を注解して次のようにもいう。

本尊瑜伽のみを修習すれば、決して成仏することはできない。また本尊〔瑜伽〕を修習しなければ、空性を他の方便と共に修習することによって多くの阿僧祇劫を経て成仏する。そして本尊〔瑜伽〕と空性の二つを修習したならば、道を速やかに進む。（Dsa, 20b³⁻⁵）

中国や日本の密教において顕教と密教の間における遅

速の差が顕密弁別の重要な論点の一つとなっているが、ツォンカパも右の引用にみえるようにこれを問題にするけれども、その場合注目されるのは、一生のうちに成仏できるのは無上ヨーガ・タントラによる者のみで、下の三タントラ類（後述）だけでは今生においては到底成仏できない、という点である（Dsa, 26a⁷⁻⁸; Wa, 101b⁸, 207 b⁸ *passim*）。

この第一章の中でツォンカパは反駁または注解を加えながら、大乘を波羅蜜乗と真言乗に分ける他の阿闍梨の考えや経軌に示された理趣を種々に紹介しているが、ツォンカパ自身の見解は右にみた通りである。要約すれば、空の見解と本尊瑜伽を併修することによって法身と色身の成就を目指すのがツォンカパの標榜した密教の肝要であつたといえよう。

四

『真言道次第論』の第二章以下は全篇「共通でない金剛乗の道次第」を解説することを目的とし、順次に所作、行、ヨーガおよび無上ヨーガの各タントラ類の実践方法

れる。先ず否定されるべき他人の見解として主として三つが挙げられ、続いて自分の承認する二つの意見が示される。その要旨を図示すれば、次のようになる。

	所作	行	ヨーガ	無上ヨーガ
四 天	梵天・癡	ヴィシヌ ヌ天・瞋	三天隨意	自在天・貪
四 学 派 (配釈明記されず)				
四 種 姓	brahmana	vaishya	kshatriya	śūdra
愛染の道	見る	笑う	手を取る	抱擁する
修習の四	外的所作	内外等分	外少内多	外的所作
種の方法	多			容
				認
				否
				定

すなわちタントラの四分法の理由として、ツォンカパは先ず四天、四学派および四種姓に基づく配釈を否定し、「欲に対する執着を道においてなす四つの異なった方法」と、「空と本尊瑜伽を相統において生ずる能力の四つの勝劣」によって四分法に対する二種類の意味付けを容認するのである。

このうち、前者は『サンプタ・タントラ』*Sampūta-tantra*を初めいくつかの密教経論に説かれ、ツォンカパによると、「笑う」「見る」「手を取る」および「抱

を詳しく解説しているが、それに先立って第一章の末尾でツォンカパは先ずタントラの分類法について述べている。

タントラの分類については八世紀のブツダグヒヤ *Buddhaguhya* の二分法または三分法以来、インドとチベットにおいていくつかの分類法が考案されたけれども、最終的にチベットで定着したのはプトゥン Bu ston (二九〇〜一三六四) が西蔵大蔵経の整理に際して採用した四分法である。これは少なくとも十一世紀のシュラッダーカラヴァアルマン *Śraddhākara-varman* まで遡り、所作 *kriyā*, *bya ba* 行 *carya*, *spyod pa* ヨーガ *yoga*, *rnal 'byor* および無上ヨーガ *anuttara-yoga*, *rnal 'byor bla ma med pa* の四支からなる。ツォンカパもシュラッダーカラヴァアルマンの『ヨーガ無上タントラ義入集』*Yogānuttaratantrārthavāra-saṅgraha* を典拠にこの分類法を踏襲し、更にかかる区分法の意味を考察する。それについて簡単に述べておきたい。

ツォンカパの論述は先に他人の見解を検討し、その不当を立証してから自分の意見を示す、という形で進めら

擁する」という四つの状態は各タントラ類に登場する諸尊の相互関係、または行者と観想の対象としての本尊との関係を表わすという。

もう一つの四分法は次のように説明される。

そのような欲を道とする方便は空と本尊瑜伽であつて、その両者を明白にするに当たって、非常に多くの外の所作に依存するのは所作タントラの所化である。外の所作と内なる三摩地との両者が等分であるところの余り多くない所作に依存するのは行タントラの所化である。外の所作と内なる三摩地との両者のうち、三摩地が主で外の所作に少しばかり依存するのはヨーガ・タントラの所化である。外の所作に依存せず、そのヨーガより上にはないヨーガを生ずることができるのは無上ヨーガ〔・タントラ〕の所化である。（Dsa, 34a⁸⁻⁹）

タントラの四分法に関する他の解釈には教理的な制約に拘束された会通釈の性格が多分にあるのに対して、ブツダグヒヤにまでその非生えが遡れる右の区分法は最も実際的な分類といえよう。但しツォンカパの指摘による

と、それは各タントラの方法の相異に随った分類であつて、所化の主名者の区別によるのでは必ずしもないといふ (Dsa, 34b⁵)。

以上、密教の経軌(タントラ)⁽¹⁰⁾に対するツォンカパの考え方を簡単に眺めてみたが、それが日本の真言宗で行われている雑密と純密の区分や、両部『大日経』と『金剛頂経』不二の思想と著しく異なることは自明であろう。そのちがいは多分に歴史的な必然性によるが、本稿の主題から外れることになるので、これ以上追究しないことにする⁽¹¹⁾。

上來検討してきた密教に関するツォンカパの考察はいふなれば理論的な側面をめぐる問題(教相)の処理が中心であつた。第二章以下、各タントラ類の実践方法(事相)が順次取り上げられる。その中で日本の真言宗と最も関係が深いのは所作、行およびヨーガのいわゆる「下の三タントラ類」である。この中でも所作タントラの道次第が基本となるので、ツォンカパはこれを特に詳述し、行とヨーガ・タントラについては異なる点を指摘するだけである。しかしその細部の検討は本稿の範囲をは

るかに越えるし、またこれに関する研究が既にあるの⁽¹²⁾。ここでは触れないことにする。

ところで、先に明らかにしたように、ツォンカパによると、密教の最大の特徴は「本尊瑜伽」である。そして彼が強調するように (Dsa, 37a¹⁰), 本尊瑜伽は下の三タントラ類にも説かれるけれども、それが最も重要な位置を占めるのは無上ヨーガ・タントラの実践課程、特にその二つの部門をなす生起次第 *utpattikrama*; *bskyed pai rim pa* と究竟次第 *utpannakrama*, *sampanna-krama*, *nispannakrama*; *rdzogs pai rim pa* である。ツォンカパにおいてである。以下、この問題を中心に、ツォンカパによる無上ヨーガ・タントラの解説を簡単に紹介してみたい。

生起次第と究竟次第は無上ヨーガ・タントラの多くの経軌に詳細に説かれ、各タントラの性格に応じて様々な変型があるが、大雑把にいえば、生起次第が絶対の側からの生起、特に曼荼羅の展開を主軸とした入我入観を説くのに対して、究竟次第は呼吸や体内の脈管の制禦などによって行者が法身へ融合同化する過程を主題とす

る。ここでその内容を詳述することはできないので、ツォンカパの考え方の要点を抽出して、両次第の孕む問題点を指摘するにとどめたい。

先に触れたように、ツォンカパによると、現世で成仏するには無上ヨーガ・タントラに頼るしかないのので、生起次第と究竟次第の実修は必須不可欠なものとなる。更に、片方だけを修したり、あるいは順番を逆にしたりすることも厳しく戒められ、必ず生起次第から究竟次第へと進まねばならないとする (Wa, 86b¹⁴)。

両次第の特徴についてはいくつかの説が引用されるが、ここで特に注目したいのは、生起次第の別名として挙げられる「觀察次第」*brtags pai rim pa* と「仮作瑜伽」*boos mai rnal 'byor* および究竟次第の異名とされる「非觀察次第」*ma brtags pai rim pa* と「真正瑜伽」*rnal mai rnal 'byor* である。生起次第において觀想される本尊は結局心の産物にすぎないので、「觀察」されたものであり、本物でない「仮作」である。これに対して究竟次第において呼吸や脈管の制禦によって風 *rlung* と心 *sems* のみから生ずる幻身の如き本尊は

觀想によらない「非觀察」のものであり、「真正」の本尊であるという (Wa, 100b¹⁴)。

このようにして生起次第によって成就される本尊が究極的なものではないとすれば、生起次第は不要で究竟次第だけで足りることも考えられるが、ツォンカパはこのような考えを譬喩で以って次のように否定する。

例えば、川の向こう側のあるところで宴会を享受せんと欲するある人が川に遮られて、「それを」享受できない場合、彼は舟に頼って向こう岸に行くようにする。それと同様に、究竟次第の富を享受せんと欲する人もまた普通の顯現「とそれに対する」執着の川に遮られて、「それを」享受する能力が生じない場合、生起次第の舟に頼って普通の顯現「とそれに対する」執着を退けた「向こう」岸に行くようにする。舟が向こう岸に行く「ための」方便であり、宴会の享受を成し遂げる「ための」別の方便が必要であると同じように、生起次第も究竟次第が生ずるに当たって相続を成熟させるもので、究竟次第の空と尊身の享受の「ための」別の方便、すなわち風や滴 *thing le* の瑜伽などが

必要なのである。(Wa, 101b-6)

従ってツォンカパは生起次第の中核をなす観想の限界を十分に承知しながら、なおその必要性を主張した。その理由を闡明するために生起次第の特徴を更に探ってみなければならぬ。

生起次第は二つの側面をもつとされる。一つは、通常認識される現象界を意味する「普通の顕現」*tha mal pai snang ba* およびそれに対する執着を退けて、「特別の顕現」*khyad par can gyi snang ba* である曼荼羅を観想すること、もう一つは我執を基盤とする「普通の慢」*tha mal pai nga rgyal* を捨て、「本尊の慢」*lhai nga rgyal* を生起することである。そしてこのうち、「本尊の慢」が主で、「特別の顕現」は明確に現われなくてもよいとされる(Wa, 104b ff.)。

従って観点を変えて言い換えれば、生起次第は一種の浄化過程に相当するといえよう。「本尊の慢」を生起することにより人格転換を図り、また「特別の顕現」を通じて認識作用の変成を目指す。この両者は表裏一体ではあるが、必ずしも併起しない。究竟次第において生理的

な要素が関わってくるのに対して、生起次第があくまで

も行者の意識状態を中心課題とすることをツォンカパが強調している(Wa, 105b ff.)。そして意識の浄化過程であるからこそ、究竟次第の前段階として不可欠な実修課程と目される。その中に含まれる様々な観法次第は畢竟全てそのための技法にすぎず、その本意を見失ったなら、観念の遊戲でしかない。「毘盧遮那や阿閼などについて身色と顔や手などの行相だけを念じ、それだけの慢をなすのではなくて、一切の過失を滅し、一切の徳を獲得した仏そのものとして信解しなければならぬ」(Wa, 112a-7)とツォンカパはいう。

ツォンカパが先に密教の最大の特徴として挙げた「果と一致した修習」とは、実はこの生起次第における「特別な顕現」たる曼荼羅の観想と、「本尊の慢」を生ずる本尊瑜伽の入我我入観の中で最も明確な形で看取できる。しかしその中に包含される問題点はツォンカパ一人だけにかかわるものではなくて、密教そのものの核心に関係してくるので、本稿の規模をはるかに越えてしまう。また究竟次第の内容についても更に詳しく述べる必要が

あるが、与えられた紙数が既に尽きたため、これ以上立ち入らないことにして、最後に『真言道次第論』全体を総括的に振り返って結びとしたい。

五

本稿を「チベット密教の一断面」と題したが、ここで取り挙げた『真言道次第論』の中で解説されている密教の実修課程がそのまま当時のチベット、少なくともツォンカパを頭とする教団においてそのまま実践されていたかどうか、実証するすべはもとよりないけれども、はなはだ疑問である。本書を通読して、ツォンカパの博覧強記、博引旁証に驚嘆させられるとともに、そのいわば教証至上主義にも気付かずにはいられない。本書の構成や各問題をめぐる諸説の取捨選択にツォンカパ自身の見解はもちろん窺えるけれども、本書の意図は独自の密教論を展開するというよりも、むしろ当時現存するインド密教の典籍に基いて再現される密教像を忠実に祖述し、合わせて当時仏教界の一部を風靡していた淫靡な風潮を払拭することにあつたと思われる。事実、生起次第の解説

に当てられる第十二章の末尾の偈頌の中でツォンカパは「自らの意見によつて汚さず」(Wa, 157b)と述べ、私見を交えていないことを言明している。

正しい教証を常に求めるといふこの態度はよく知られるように、ツォンカパの学問の特徴の一つで、後にゲルク派において一種の鉄則となる。従って、経軌からの引用に対する解釈の中にツォンカパの潔癖主義が濃厚に現われているけれども、『真言道次第論』の価値も、当時のチベット密教の実態の一断面を彷彿とさせるというよりも、インド密教に近付くための手がかりになるという点にあるとさえいえる。いうなれば、インド密教への手引きであり、ここに本書の特徴と限界があるといえよう。

これに関連して本書において特に注目するもう一つの点はその理論整然たる性格である。神秘性や晦渋さの代名詞のように理解されがちな密教を、これほど精緻きわまる組織のもので体系付けたことこそ一つの驚異である。これは本書の題名にも反映される、チベット仏教全般に広く認められる「道」および「道の次第」の重視

と無縁ではないであろうが、同時に組織的な整合性を追求する余り、先にみたツォンカパの没自己的態度と連動して、宗教的情操に欠け、また実際の修習から遊離しているきらいもなくない結果を招いている。

一七世紀に宗政の二権を擁立するダライ・ラマの制度が確立されて以来、ツォンカパを始祖とするゲルク派の勢力が急激に伸長し、ツォンカパの著作をことさら尊重するようになったけれども、『真言道次第論』に關していえば、他宗派においても、その大小はともかく、多くの密教綱要書が編まれたことを忘れてはならない。チベット密教研究の今後の重要な課題は各宗派の主張を比較検討し、その共通点と相異点を明らかにする点にあるといえよう。かくして『真言道次第論』の特徴と意義も初めて究明されるようになるであろう。その際、ツォンカパの没後、ゲルク派が建前としては密教の優位を認めながらも、実質的には顯教主義に変わり、密教がその中で儀式化していったという事実も、本書の役割りを考える上で重要な視点となるであろう。

このようにして、『真言道次第論』およびツォンカパ

の密教観をめぐって追究すべき問題が沢山残されている。本稿では簡単な紹介といくつかの問題点の指摘にとどめざるを得なかった。チベットの他宗派の学僧の見解との同異、ゲルク派内部における密教の変貌、ツォンカパが引用する経軌の綿密な検討、更に中国や日本の密教との比較等々、全て今後の課題といえよう。

註

- (1) 長尾雅人『西藏仏教研究』(岩波書店、一九五四年)、三五頁以下。
- (2) 北京版の葉数を示す。以下同様。
- (3) 長尾雅人、前掲書、六〇頁。
- (4) 同右、三九六―八頁参照。
- (5) 『真言道次第論』の全訳として法尊法師訳『密宗道次第廣論』(『佛教大藏經』第四十九冊所収、佛教出版社、台北、一九七八年)がある。部分訳としては高田仁寛『チベット真言密教の研究』(密教學術振興会、一九七八年)や Jeffrey Hopkins: *Tantra in Tibet: The Great Exposition of Secret Mantra*, London, 1977 がある。また H. V. Guenther: *Treasures on the Tibetan Middle Way*, Leiden, 1971 の前半の記述は本書に基づいている。
- (6) 全科文の中国語訳は前記の法尊訳の冒頭に掲げられ

Tokan Tada: *sNgags rim chen po'i sa bca'd*, Nagoya, 1978 には全科文の藏文が列記されている。また小川一

乗『ツォンカパ造『秘密道次第論』の第一章(序説)について』(『大谷学報』第四十七卷第二号、一九六七年)七六―八頁には第一章の科文の和訳が示され、高田仁寛、前掲書、七七頁には第二・三章の内容要略が表示されている。

(7) 小川一乗、前掲論文、七九頁以下にこの問題が詳しく論じられている。

(8) これに対して、例えばニンマ派のロンチェン・ラブチャム、*Klong chen rab 'byams pa* (一三〇八―六三)は果に勝劣があるとする(高田仁寛、前掲書、三九頁参照)。

(9) この見解は、ツォンカパが四分法に対する自らの主張を述べるに先立つ次の一節と一見矛盾するように見える。

タントラ類による様々な入門「の仕方」を四つに整理したのは、乗が別々であるからでもなく、本尊瑜伽等の道の様々な相異のみによってでもない。しかし、金剛乗に入る主要な所化によって四つの甚だしい相異があるから、入門「の仕方」を四つに整理したのである。(Dsa, 31b⁴⁻⁵)

すなわち、ここでツォンカパは四分法の契機を方法の相異ではなく、所化の質のちがいに求めている。この

四分法が本来固定的なものではなく、実践の進展に対応していたことが示唆される。

(10) 『真言道次第論』には各タントラ類に属する経軌の概説はないが、これは高弟のケードウンジ・mkhas grub rje の『タントラ類総論』*rgyud sde spyi'i nam par gzhag pa rgyas par byed* (東北 No. 5489) に於いて補足された。

(11) なお高田仁寛、前掲書、四三―五二頁には四分法をめぐるツォンカパとロンチェン・ラブチャムパの考え方の比較がなされている。

(12) 高田仁寛、前掲書、七五―八五頁。

(13) 『真言道次第論』の生起次第の解説については S. Beyer: *The Cult of Tara* (California, 1975), p. 68 ff. と H. V. Guenther: *op. cit.*, p. 67 ff. に詳しい。また同書の究竟次第の解説に關する論究として S. Beyer: *op. cit.*, p. 127 ff. がある。なお「果と一致した行相の修習」については以前私見を若干述べたことがある。拙論『密教の実践における象徴をめぐる試論』(『東洋學術研究』第二十卷第二号、一九八一年)一八六頁以下参照。

(東京大学大学院修士課程修了)